

# カナダの日本語月刊誌「月刊ふれいざー」に掲載された

## 高橋さんの記事「自然と生きる」を紹介

高橋 清さん（29C）のカナダの自然保護活動については、群大工業会の会報やホームページの「卒業生ニュース」を通して、あるいは群大山岳部OB会のホームページを通して、群馬大学の同窓の皆様にご愛読いただいております。最近、高橋さんと暑中見舞いの交換をしていたところ、カナダBC州(British Columbia)での日本語月刊誌「月刊ふれいざー」に高橋さんが、「自然と生きる」という見出しでカラー写真をたくさん入れて、毎月執筆されていること分かりました。以下8月号をご参照ください。



詳しくは、<https://www.thefraser.com/> を通して、高橋さんの「自然と生きる」を読んでください。

以下は各号の所在ページはいずれも25ページで、題名は、以下の通りです。各号の目次を参照しながら、検索してください。又この「月刊誌ふれいざー」には興味深い記事がたくさんあります。加えて読んでください。

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 8月号 野生と生きる一絵を描く     | 7月号 野鳥、野生動物の生存率の低下 |
| 6月号 野鳥、野生動物の生存率低下は… | 5月号 ミサゴとカナダギースの争い  |
| 4月号 春の小鳥 25         | 3月号 新しい人との出会い      |
| 2月号 コヨーテが消えた        | 12月号 熊との出会い        |
| 11月号 ムラサキツバメの保護活動   |                    |

以上「月刊フレイザー」の各号にアクセスしていただき、各号の高橋さんの「自然と生きる」を楽しく読んでいただければ幸いです。

望月恭一（35C）

なお、8月号、3月号、12月号の高橋さんのページを参考に添付しておきました。印刷したものをスキャンして掲載しました。画質が落ちていますが、少し画面を大きくすれば何とか読んでいただけたらと思います。

# 自然と生きる

高橋 清

## 野生と生きる—絵を描く

この歳まで生きて振り返ると、記憶に明らかに残る僕の人生の第一歩は好奇心だった事を身に沁みて感じる。僕の生涯最初の、鮮明な記憶として残っている事件は、やっと歩いた2歳の頃、母に連れられて、足尾線の間々駅までの散歩の記憶。駅の待合室に着いて母の腕から降ろされると同時にそこに燃えるストーブに興味を持ってよちよち駆け寄り、周りの人の悲鳴の中で、燃える炉の扉に触れて気絶。気が付くと両掌を包帯に巻かれて母の腕の中で泣いていた記憶。以来、燃える樹のにおいが懐かしく僕の中に生きていて、カナダに来て住んだ3軒の我が家すべてに欠かした事の無い Wood Stoveと共に、僕の人生で忘れられない生涯初めの記憶である。その後小学校に入る前から父にキノコ採りを習い、父と兄から魚釣り、中学で山登りを兄から教わった。大学で最も多くの記憶に残るのは学問よりも山岳部生活である。そして今91歳、山登りや梯子登りも出来なくなる歳に達した。

90歳を迎えた昨年、急激に進む体力の低下の中で、仲間と鳥の巣箱の取り付けをした時、僕の3メートルの高さの梯子作業を仲間が認めなかった経験の後、漸く僕は自分の年齢に気付いた。「ああ、もうおしまい」とショックを受けた僕は、心の葛藤の後で、気分転換に昔から何となく興味を持っていた「焼き鏝絵」を試してみる事にした。早速昔から使っていたハンダ付け用の電気こてで試すと、意外に絵が描けたが、鏝が重くて自由が利かない。早速 Lee Valley のカタログから「絵」専門の焼き鏝を求め、ネットで基本的な手ほどきを学んだ。その結果昔からよく行っていたスケッチの感覚で意外にまあまあ出来、その最初の絵が大好きな熊である。

考えれば判る事だが、やがて気付いたのは焼き煙の危害。ひと頃は年に2、3回は救急車を呼ぶほどの、かなり重度の肺気腫を持つ僕の呼吸器は、咳を發して警告する。それはガラージの扉を開けたまま小型の扇風機を使う事で大方の解決が出来た。冬の作業はちょっと堪えるが、絵に熱中するとあまり気にならない。間もなく、鏝の刃先の形による線の違いも覚え、今は上手下手は別として、色々な絵を試し、自然の風景や野生動物の絵等は気分転換にもって来いの趣味となった。しかし矢張り煙の発生は僕にとっては大きな支障だ。

そんなことから、大学生の頃良く趣味にしてきたスケッチや水彩も再開することにした。油絵は残念ながら、その油の匂いに依る呼吸困難を何度か味わって、医師から禁止され、屋内の遊びとしては僕には不適と分かった。そこで気の乗ったときは、特に寒い日は部屋で水彩画、あまり寒くなければ冬でも、ガラージのドアを開けて外気を吸いながら、焼き鏝を氣を向いた時、特に気分転換が必要な時に、自由な、個人の楽しみとして実行している。最近では水彩用の鉛筆、色ブラッシュなど、色々な画材が出来ていて益々楽しい。



カナダに来て間もないころに描いた油絵



大学時代のスケッチ、西黒尾根から見た谷川岳



ブラックキャップチカディーの焼き鏝絵



若いオオカミの焼き鏝絵



初期の焼き鏝絵によるタロー



群馬県、渡良瀬川にかかる昔の橋



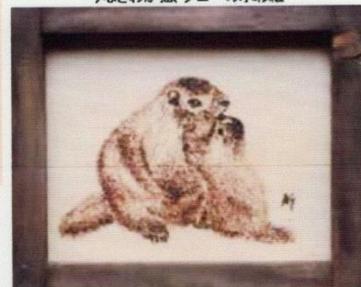
子リスのベアーの焼き鏝絵



リバーオッター(最近の色鉛筆の絵)



今なきわが猫、タローの水彩絵



黄腹マーモットの焼き鏝絵



初めての焼き鏝による、大好きな熊の絵



大学山岳部時代の写真を素に氷壁登攀のスケッチ

# 自然と生きる

高橋 清

## 新しい人との出会い

心血を注いできた野生保護の仕事は、91歳となると、ここまで体力を消費する事を、身に沁みるようになった。第一線から退こうと、後継の集まりを探して委託しようとしてきたが、諦めざるを得なかった。事例のいくつかを除いて、ボートムーディーのロッキーポイントに取り付けた最も手間のかかる鳥の巣箱造りや、取り付けた箱の年に一度の掃除、補修などの仕事は、真っ先に問い合わせた市では取り扱い不能だった。すると友人が紹介してくれた、当地のMen's Shedという団体が興味を示してくれている事が分かった。正直のところ、以前名前を聞いた時は、年寄りの男たちが集まって掘立小屋で酒でも飲みながらおしゃべりをするのかな、と間違った解釈をして無視していた団体だ。しかし実際初めて会合に出席してみても、中年以降の会員の真面目さと多くの知識者の集まりであることに驚いた。勿論、週一度の集まりに出席していたのは15人ほど。会員は皆中高年であることは予想通りだったが、中に僕の顔を見て「やあ、久しぶり」と言う、僕の記憶に戻ってくるのに時間のかかった人もいた。

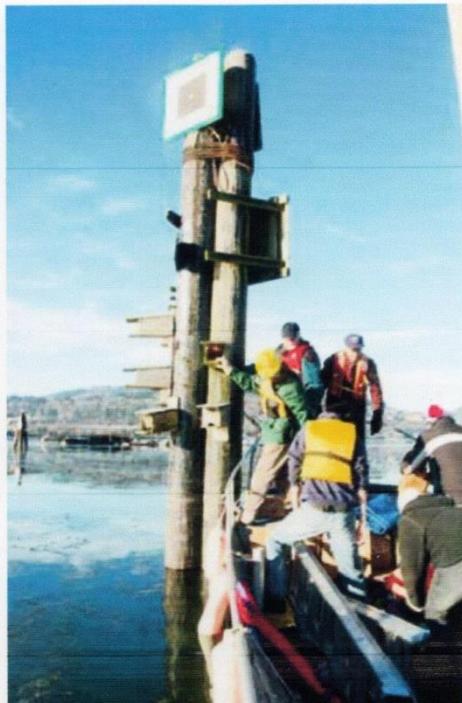
我が家のガレージ程の大きさの、今年の春に建てたという小屋の中には、僕の目には慣れていない木工用器具が所狭しと並び、15名ほどの人たちがその間の隙間に所狭しと立ち並んで会議を開いている。責任者らしい人が話をしていて、やがて会員に僕の名を伝え、「この男は何か我々に頼みたいことがあるんだそうだ」とだけ言って僕の発言を促した。もう決まっていることと勘違いし、予期していなかった僕は、早速この「ムラサキツバメ」の歴史と、彼らの生息範囲が南米のブラジルから北米のカナダも含めた中・東部の全域に及び、北米の太平洋岸に生息してきたこと、そしてこの40年ほどはワシントン州からバンクーバー島、フレイザー流域の内陸地にまでその生息範囲を広げていることを、簡単に説明した。予想通り、鳥を知らない人たちのことで、ムラサキツバメを知る人は殆どいなかった。

話が15分ほどで終わると、この鳥の保全に必要な、巣箱の年一度の掃除、定期的な補修や新居の作成などのほか、僕が個人的に希望している巣場の開発の仕事を続けるのをどうするのかの質問があったので、コロニーファーム、ピットリバー、コクイットラムリバー沿川の新しい場所を開発したい、と言うと、「それでは、この仕事は1回りの作業でなく、継続の必要があるのだな」と誰かが発言。そのまま全てに同意、ということが即時で決まった。

定例会合はその後も約1時間ほど続き、傍で聞いていると、例えば、市民で体調不全の友人から、独り住まいの家で階段が壊れたので修理しなくてはならない、と希望が出ると、その場で「俺が手伝う」と言う人が二人で担当する事になり、プロジェクトがそこで決まった。こうして、市内或いは近郊で必要な作業があると、時間と経験のある人たちが協力して扱う習わしがあるようだ。経費については、作業の希望者からの出費があればよし、ない場合には市役所や当地のいろいろな団体との連絡で始末するようである。

そうして会が終わわり、帰宅しようとする、僕は既に会員に登録されている、とのことで、その場で会費を支払わされたのには正直驚いた。そして更に、時間のある人が皆集まって自費の昼食を一緒に取るの

で来ないか、と誘われた。僕は今体調に大きな問題を抱えていて、外食を原則差し控えているので断わざるを得なかった。メンバーの自己紹介など無しで、ほぼ2月経った今も2、3名の人の名前しか知らない始末だが、僕がこの会に12月に来た理由である小鳥の小屋造りとその管理の依頼という簡単なものではなく、結局、その小屋造りから取り付け、整備まで一緒にすることが何時の間にか決まっていた。何の事はない、仕事から手を引いて静かな残りの人生を送ろうとしたのに、実は新しい会に入って、仕事を続ける事が決まっただけのことだった。



ロッキーポイントでの作業、(2027)船の上からの作業



ブラッキー - スピットに昨年立てた新しい巣箱の三角構



ロッキーポイントで、船の上からの作業

# 自然と生きる

高橋 清

## 熊との付き合い

今年もクマの季節が終わりに近付いている。最近、クマの出没が減ってきていると感ずるのは僕だけだろうか。近年までは、性格もカタチも違う数種のクマ君が毎週のように我が家の庭を通り過ぎていたが、この2、3年は稀になり、今年はまだ3回しか庭で面会できていない。最近のTVのニュースによると、今年も約30頭のクマがBC州の住宅地に出没したために殺され、カナダ全土では数百頭、と言われているようで、哀しいことである。いつも言うように、私たち人の住む土地はもともと彼らのもの、何とか共存できる努力が出来ないものだろうか。クマ君の危険度は、彼らが民家の庭を壊すとか、特にゴミ箱を漁る事により人が騒ぎ立てることが原因で、「人に危害を与える熊だから……」という理由で殺されることが多い。人から出た汚物を、ゴミ箱に入れたからと言って庭に置き去りにすると、強いクマの嗅覚を刺激し、食の少なくなった民家のあたりでは、空腹を満たすために彼らは当然の事としてゴミ箱をひっくり返して騒ぎとなるのだ。熊や獣の食べられそうなものは、次回のごみ回収の日まで、必ずしっかりと封鎖したうえで、物置、ガラージ、それのない場合には家の中に保存するべきである。

熊は僕にとって大好きな野生動物の一つだ。カナダに来て56年の自然に密着した生活の中で、無数の出会いがあったが、そのすべて、一例を除いて危険を感じたことはない。その事件は会社を早期退職をして辞めた直後、ボランティアとして自然にかかわる仕事である Wildlife Rescue Association で仕事を始めたころのことであった。現地の幼稚園児の団体を招いてミネカダ公園に自然散歩に出かけた時の出来事だ。小鳥の鳴き声の話をする中でしている時、幼児たちは当然まだ鳥の鳴き声に興味がない。気が付くとその林道の少し先を3歳くらいの幼児がチョコチョコと歩いて行くのが気になった。目を配りながら話をしていると、突然その幼児の数メートル先の茂みからまだ1歳児の子熊が出て、幼児に興味を示して進もうとしている。僕は咄嗟に大声を上げながら走った。小熊はもちろん驚いて林道の反対側に飛び込んだが、その後母熊がのっそりと表れて立ち止まった。幼児の数メートル先だ。僕は頭が真っ白になる中で叫び続けながら母熊に向かって走った。僕のその権幕を見た幼児は大声で泣きだしたので、それが更に熊脅しの助けになって、僕と二人の声で母熊は立ち往生。幼児を抱き上げた途端に、母熊は僕が急に大きくなったと誤解した様で、「此奴にはかなわないわ」というような残念そうな顔をしてそっと森の中に子熊の後を追って去っていった。そのとたん、お母さん連中はやっと正気に戻ったのか、「キャー、キャー」と大声を上げだしたものである。

それから数年、ミネカダの森はよく一人で歩いたが、ある時その事件のあった地点に差し掛かると、藪の中に何か音がする。足を止めて目をやると、そこには完全に成長した巨大な熊が、こちらを見ながらゆっくり近付いてくる。あたかも知り合いに会ったような気配でじっと僕の顔を見ながら、ゆっくり僕の歩く道に向かって進んできた。その目を見ていて突如僕は、「ああ、あの時の小熊君だ」と気が付いた。よく考えてみると全くその証拠も何もなし、これは単に僕の独りよがりだったろう。でもそれは構わない。僕はその時懐かしくて、彼がごく平静に近寄ってくるのを見守った。道の際まで来た時、僕は、「やあ、久しぶり、元気かい」と声をかけてしまった。理解したのかどうか、クマ君は僕の前3メートル位の所をごくゆっくりと道を越えて、森の中に消えていった。その彼の通り過ぎた後から、ぶっつとおならの様な匂いが流れてきて、僕はなおさら親しみを覚えたのだった。

[www.thefraser.com](http://www.thefraser.com)



我が家の裏のさくを乗り越える若くま(2歳児?)



リバービューで会った少年熊



ミネカダ公園の裏で車を止め見送った熊の親子



リバービュー病院敷地内の巨木の上で居眠り



稀に見られる、大ボスの熊様